

「モノ」には物語がある

(株)トイズ代表取締役

北原 照久

●インタビュアー

循環とくらし エディタ

南 明紀子

[文責] 鍛冶 美行



「開運！なんでも鑑定団」でレギュラー鑑定士として活躍されている北原照久氏は、おもちゃのみならず、役目が終わると簡単に捨てられるモノたちをコレクションすることに愛情と情熱を注がれています。その膨大な数のコレクションの価値を次代へ伝える文化遺産にまで高められた北原氏に、氏の人生観をはじめ、おもちゃの魅力やおもちゃと人の関わりについても、独自の視点で語っていただきました。

おもちゃのコレクション

おもちゃっていうと、え～！そんなもの？と思われる方がいらっしゃると思いますが、「開運！なんでも鑑定団」もおかげさまでこの4月で20年経ちましたから、その中で色々評価は変わってきました。昔は、おもちゃを集めていると、変人、奇人、オタク扱いだったのが、最近では偉人扱い、もう「おしゃれですね」って言われちゃう（笑）。おもちゃって、使用目的が終わって捨てられちゃう、その最たるものですよ。子どもが遊んだあと捨て

られちゃう。歌詞にも出てきそう、「遊んで捨てられて・・・おもちゃみたい」って。おもちゃは、そういうイメージと、もう一つ安っぽいイメージがありますよね。でも、海外ではおもちゃのコレクターって結構いるんです。実は、大人のホビーなんです。インテリアとしておもちゃを飾ったり、部屋に置いたりすることで、気持ちが楽しくなる。わくわく感っていうのは、子どもも大人も持っているものですよ。ノスタルジーだけではなくてイメージネーションが広がって、かつて子どものときに持っていた「ときめき」が



写真1 世界のスターたちが訪れ、コレクションを語った部屋

蘇るみたいな。だって、ポール・マッカートニーや、ミック・ジャガー、グラハム・ナッシュ、デミ・ムーア、みんなおもちゃが好きで、この部屋で語り合っただけですから（写真1）。

最初のコレクション

僕が、一番最初に集めたものは、柱時計です。それこそ、粗大ごみで捨ててあった柱時計（笑）。20歳のときからモノを集めはじめたんですけど、それこそみなさんから見れば「ガラクタ」。要らないから捨てちゃうようなものばかりです。でも、「あ、懐かしいな、これ、子どものときに持っていたよ」、と思って部屋に飾ってみたら、「すごい、おしゃれ！」だった。とにかく暮らしを楽しみたいというのが僕のコンセプトだから、楽しいものに囲まれて生活をしたいって思っていました。人がどう言おうが、自分が好きなものだったら何でもいいんです、それは。僕の場合は、今ならリサイクルショップのようなところで売られていた真空管のラジオ、コカコーラの看板、不二家のペコちゃん。映画のポス

ター、広告のポスターだったわけです。

おもちゃコレクションとの出会い

本格的におもちゃコレクションを始めたのは、25歳のときです。たまたまインテリア雑誌に、おもちゃを棚に飾っている矢野さんって方の部屋が載っていたんです。今では、一緒に「好きな事をずっと仕事でやっっていくために知っておきたいこと」という本まで出していますが、彼の部屋にコカコーラの看板があったりペコちゃんもあったりしたんですが、何よりも、壁一面の棚に、子どもの頃に遊んでいたブリキのおもちゃが、ずらーっと並んでいるのを見て、凄くインパクトがあって、何かこう、「すごおーい！」と思ったんです。僕の性格的に良いところは、すぐに実行に移すってとこなんです。それで、すぐに編集者に電話して、矢野さんに会わせてくれないかって頼んだんです。そしたら、矢野さんが、いいよって言うてくれて、その矢野さんとの出会いが切っ掛けで、おもちゃを集めはじめることになるんです。

そのときから現在まで、収集した数というのはもう数え切れなくなってしまい、常設展示6箇所のほか、420坪の倉庫を借りて収集品を保管しています。このあいだ引っ越しするのに、4トントラック109台で運びました。もう、人間業じゃない(笑)と思えるほど、一台でモノがこんなに積み込まれるのかっていうくらい積み込んで引っ越ししたんです。まるで、インディージョーンズの世界ですよ。マッチのラベルは20万枚以上、映画のポスター7,000枚でしたからね。

コレクションの魅力

1. モノには物語がある

確かに大量生産、大量消費の時代ですが、19世紀後半からの産業革命以来、印刷技術、生産技術が画期的に向上したことで、たくさん作られてきたことから、逆に、ある面、みんなが共有した楽しみだとか、暮らしがあったわけです。この、ポスター(写真2)。ぐっときませんか?この無彩色の背景に、ワンポイントの赤いワインの色を出すために70回も刷り直し、モデルはこのポスターの所為で勘当されたんですよ。そういった時代背景だとか、歴史があるわけですよ。たった1枚のポスターにもこれだけの物語があるんですよ。

この鉱石ラジオは今でも鳴るんです。昔、ふとんかぶってマイラジオだって言っていた、ここには、思い出があるわけです、自分の思い出が。こっちは、駄菓子屋さんで売っていた時計。動かないですよ。自分で動かす



写真2 1922年ドイツで開催された世界ポスター展で1位となった。広告界の鬼才といわれた片岡敏郎の作品

んです。それでもね、子どもが大人の真似をやりたくって、動かすわけですよ。今は、モノは大量に作られているので安くなって、子どもでもちゃんとした時計を持っているけれども、僕らの子どものときはこれですもの(笑)。でも、空想ができた。3時のおやつ!だって言ってる。空想と想像とコミュニケーション。モノには物語がある。それを感じたときに、愛着だとか、愛おしさだとか、時代を知る喜びだとかある。色々な時代背景を想うことができるんです。トリップです。その「モノ」から旅をすることができるんです。

2. コレクションの数から世界が見える

もう一つ言えることは、数は力で、段々その数が増えてくると、総量からその世界が見えてくるわけですよ。最初集めたときはわからない。これは、誰が作ったものだろう、いつ作ったも

のなんだろう。例えばおもちゃだって、歴史があり、種類があるわけですよ。ブリキのおもちゃがある、紙のおもちゃがある、木のおもちゃ、セルロイドのおもちゃ、ダイキャストのおもちゃ、プラスチックがあつて、種類がいっぱいある。そこで、調べる、さらに興味を持つ、さらに集める、さらに調べる、分類する。これは間違いなく学問の世界ですよ。例えば、このおもちゃは戦時中に作られた。これは戦後に作られた。作られた年代によって、その雰囲気だとか、作り方だとかが全部、違うわけなんです。一つ、二つでは気がつかないけれど、100、1,000になってくると、完全に時代が分けられてくるんです。時代の移り変わりが手に取るようにわかるようになります。

だから、20世紀の、それぞれ日本の庶民の暮らしを知る上で、間違いなく僕のコレクションは最大の資料になっています。実は、僕のコレクションの中でおもちゃは2割くらいで、後は、

現代作家のコレクション（写真3）、広告のコレクション、映画関係のコレクション、レコードのコレクションの数の方が圧倒的に多いんです。こんなものを使っていたんだ、こんなもので遊んでいたんだ、こんな映画があつたんだ、こんな音楽を聴いていたんだ、というように、日本人の生活を知る上で最大の資料になるはずですよ。

例えば、明治時代の女性で歯を見せているポスターはありません。眼は一重眼で、丸髷、着物を着ているでしょう。大正時代になってようやく洋装が出だしますが、まだ歯を見せているのはない。しかし、昭和になってくると、歯は見せるわ、二重になってくるわ。こういうファッションだったんだ、こういうヘアスタイルだったんだ、ということを見ることができると。

100の苦しみ、101の喜び

だから、そういうものを僕は残しておく、次の時代に伝えていく、みたいな思いを抱いています。もう神様が僕に役割というか、使命を与えてくださったんですよ（笑）。だから、こんな苦行に僕は耐えているのかなって思っていますよ。

苦行ですよ、コレクションは。欲しいと思うと、いつもずっと頭の中のどこかにその欲しいという情熱的な気持ちがあるわけです。さらに、どうしてもお金が必要になるわけです。捨ててあるものを拾って来るにも、そこに行くためにお金がかかるじゃないですか。コレクションすると、好きから始



写真3 現代作家ムットーニこと、武藤政彦のThe night angel comes という作品。Angel eyesの調べに、からくり人形の作りだすファンタジー作品

まって、一つから二つになって、10個になり、100個になる。そして、これを保存するのもお金が掛かる。

ということは、100の苦しみと101の喜びですよ。喜びだけがあるだけじゃないんですよ、本当に。100の苦しみがあるんですよ。でも、一つだけが勝っているんですよ、喜びが。だから続けられる。でも、僕は気概なコレクターです。今となれば、声を大にして言いますが、普通じゃないよね(笑)。だって、皆がお金を払って捨てているものを、僕はお金を払って買っていたんですから。本来なら、これ、もう、ごみですよ。使用目的を達成して捨てられちゃうようなもの、そこなんですよ。広告のポスターとかね、ペコちゃんとか、放っておいたら、みんな捨てられちゃう。それを買集めるとい。買うためには一生懸命働けなければいけない。でも、もちろん、手に入れた喜びがあるからできる101の喜びです。僕に見つけられるためにそこにいたんだから。

言葉のコレクター

言葉についてもコレクターです、僕は。何でも集めている(写真4)。琴線に触れたものは何でもいいんです。講演会をしたら僕の書いた本をいっぱいみなさん買ってくださるんですね。講演を聞いて本を買ったのは初めてですよ、とか言ってくださるので、僕、詐欺師かなって思ったりするの(笑)。講演会では、僕はコレクションの話はしない、おもちゃの話なんかゼロで



写真4 Facebook 100の言葉!シリーズ
毎日 Facebook で届く「希望の言葉」のコレクション。2012年に発行された第1弾が好評を博し、2013年に第2弾が発売された。

す。もう、生き方です。100年に1度の不景気だって、リーマンショックから言っていますよね。ラジオやテレビなんかで言っているのは、あれは「不況活動」っていうんですよ。もっと歴史を勉強してください。この100年で何が起こりました? 第一次世界大戦があって、第二次世界大戦があって、何十万人の人が餓死したんですよ。栄養失調ですよ。オイルショック、阪神の震災、そして今度の震災。日本の人々は、全部それを建て直してきたんですよ。それを十把一絡げでね、不況というのは止めましょうっていうんです。不況って、今、心が不況なんですって言うんです。誰も日本で餓死する人なんていないじゃないですか。栄養失調で亡くなる人はいない。世界にはいっぱいいるんですよ。それくらい、日本はある面、豊かなんです。だけど、心が不況なんです。

こどもとおもちゃ

おもちゃって、子供にとって必要不可欠なものです。もう古代からずっと、絵などで残っているように、子どもは成長の過程の中でおもちゃらしきもの、木の枝や石ころとかで遊んできたわけですね。語源は「もてあそび」とかっていいですよ。木の枝でちゃんばらごっこしたりしてね、何でもおもちゃになるんですよ。大事なのはね、遊ぶことから実際体験して、色々想像ができるようになっていくってこと。木の棒で叩かれたら痛い。木でおもちゃを作ろうとして、怪我して痛い、でも出来たときにはだから嬉しさもひとしおだとか、そういうことも大切なことです。でもそうはいっても、今のテレビゲームだとか、デジタルのものだって、否定なんてできないんですよ。否定したら、取り残されていっ



写真5 人に元気を与え、いつまでも若々しい北原氏。今でも素直に感動する屈託のなさが、人を魅了する。

ちやいますから。だから、僕たち大人が子ども達に色々な事を伝えていかなきゃならない。新しいものを否定しないで、古いものの良さを子ども達にもう一度再認識させる事も大事な事じゃないかなと思います。今でも、フランダースの犬や小公子を読んだら、子ども達は泣くんですよ。今ね、コミュニケーションができない、個になっている、それが一番の問題ですよ。優しさだとか、おもいやり、そういう人の痛みを知ること、そういう教育が必要なんです。教育問題みたいになってきちゃったね(笑)。

「モノ」の恩返し

僕ね、ウンケル北原っていわれているんですよ。風邪が治るって(笑)。北原さんからエネルギーもらったと言ってもらっています。でもね、エネルギーなきや、これだけモノを集められないと思いますよ。確かに、僕はモノに脚光を浴びせるのは上手い。モノが喜んでくれている。だから、「モノ」の恩返しで、僕が集めた膨大なコレクションから、僕が元気をもらっていると思っています(写真5)。

今、僕は(一社)日本玩具協会が主催しているおもちゃ大賞の審査員長をやっています。2012年で5年目になります。賞は会社にはなくて、作ったその人、開発者にあげるわけです。こどもの知育・教育に特に貢献する玩具「エデュケイションナル・トイ部門」、男の子向け玩具「ボーイズ・トイ部門」、女の子向け玩具「ガールズ・トイ部門」、

キャラクター使用玩具「キャラクター・トイ部門」、素材・技術的に優れたもの、新規性のある玩具「イノベイティブ・トイ部門」、大人が楽しめる玩具「ハイターゲット・トイ部門」、そして障害のある子どももそうでない子どもも「共に遊ぶ」配慮が施された玩具「共遊玩具部門」の7部門があって、部門ごとに大賞1点と、優秀賞4点を選びます。もの凄い数を審査するので、僕一人じゃなく、何人かで審査して、おも

ちゃ大賞を決めているんですよ。

これから僕が期待するおもちゃといえば、子ども達に愛される、楽しめるおもちゃ。できれば、残しておきたいと思えるおもちゃがいいですね（笑）。

◆ブリキのおもちゃ博物館◆



写真1 ファンシーグッズ店を思わせる白い洋館のたたずまい

横浜、山手に外国人墓地を見下ろす道を少し左に折れると、「ブリキのおもちゃ博物館」があります（写真1）。ここは北原氏のコレクションの中でも、1890年代から1960年までの日本製の

ティン・トイ（ブリキのおもちゃ）、約3,000点が展示されているところです。

まずはファンシーグッズの店構えのような扉を開くと、ミュージアムグッズがところ狭しと並んでいます。この部屋を横切ると、そのままおもちゃ博物館に直結していて、入り口にある「ブリキのおもちゃが出来るまでのポスター」が訪れる人を迎え入れます（写真2）。

「ここは、おもちゃが主人公なんです。かつての時代時代で、捨てられたり、姿を消したりしたおもちゃが幻のように在ります。まるで、昔の友達に出会った気持ちになりますよ。とても懐かしい、癒しの空間になっているから、一度見に来ていただければ嬉しいです」とは、北原氏の言葉です。

ブリキのおもちゃだけが並んでいるところが圧巻で、でんでんだいこや扇風機、電話、車のティン・トイも陳列



北原 照久 PROFILE

1948年 東京都生まれ。(株)トイズ代表取締役、横浜ブリキのおもちゃ博物館館長。世界的にティン・トイコレクターの権威として名を立てる。コレクションは明治以降の看板や広告、マッチ箱のラベル、時計やラジオ、レコードジャケット、ポスターなど多方面に亘る。テレビ「開運！なんでも鑑定団」のレギュラー鑑定士として活躍するほか、雑誌やラジオ、講演会など幅広い活動を続けている。『珠玉の日本語辞世の句』PHP研究所、『facebook100の言葉！2』サンクチュアリ出版、『好きなことをずっと仕事でやっていくために知っておきたいこと』矢野雅幸共著シーコースト・パブリッシング出版等、多数の著書がある。

されています（写真3）。イラストレーター内藤ルネ氏が、エッセイで書かれていたスズメのティン・トイ（写真4）もそっと一緒に並べてあります。また、made in occupied Japan と呼ばれた第2次世界大戦直後、ブリキの缶詰のブリキを使って、作られたティン・トイもあります。多くはアメリカに輸出され、ここを訪れるアメリカの旅行客からも、これで遊んでいた、と昔の少年時代に戻られる人も少なくないとか。

トイ・ストーリーの監督、ジョン・ラセター氏もここを訪れた一人です。トイ・ストーリーはフルCGの長編アニメーション映画ですが、映画を制作するにあたり、ここブリキのおもちゃ博物館を訪れた際に、インスピレーションを受けたとの逸話もあります。

おもちゃに永遠の命を与えてくれるミュージアム、おもちゃが生き生きとして喜んでいるように見えたのは、私たちだけではないようです。



写真2 ブリキのおもちゃができるまで



写真3 ブリキのクルマ



写真4 ブリキのスズメ

人形作家・イラストレーターの内藤ルネ氏が、銀座の和光のディスプレイでブリキのスズメを見たときに、思わずその美しさに足を止めたというエッセイがある。